



日本の複数の地域を巡りながら、オンライン学習で大学卒業資格が取れる――。

様々な社会課題解決のためのプロジェクト学習に没頭しつつ、社会をサステナブルに変えていく――。

そんな未来を思い描き、二〇二二年春「さとまなプログラム」を立ち上げたのは、

「さとのば大学」の信岡良亮さんと「ネットの大学 managara」の阿野孝さん。

地域を旅しながらプロジェクト探究をする市民大学の「さとのば大学」と、完全オンラインで

大卒資格取得が叶う「managara」のダブルスクールという形で、新しい学びの仕組みが誕生した。

編集…宮部 誠二郎 文…西谷 渉 写真…Aya Petite

地域で学び、大学卒業資格を目指す

「さとまなプログラム」発足のきっかけは、昨年の秋に遡る。両者を繋いだ一人は、TURNS プロデューサーの堀口だった。昨年の小誌の同じ特集（TURNS vol.6「学びを止めるな」）でも紹介していた。もともと島根県の手士町を舞台に、地方創生や持続可能な社会づくりに取り組んできた信岡さん。その後、東京にも拠点を増やし、都市と地域の関係性づくりをベースに活動を続けるなかで「さとのば大学」の構想が生まれた。「教育システムというよりは、社会をサステナブルに変えたいというのが先にあって、だけどそのための実行人材は少ない。未来に向けて変化の大きな学びをつくらうとしたら、大学という四年間が変わるのが一番ではないか」と信岡さんは語る。

クラウドファンディングで一千万円の資

金調達に加え、社会に必要な学びの問いかけの機会、そして共感する仲間を獲得して「さとのば大学」が誕生したのは二〇一九年のこと。まずは、三か月間のプログラムから始まり、翌年には半年コースをスタートした。賛同してくれる地域が少しずつ増え、連携してくれる大学も出てきたが、一般の大学と肩を並べるような、四年間コースの導入までベースをあげたかった信岡さんは、「通信制の大学と連携して、通信の大学で単位を取りながら学士を目指す仕組みを考えたい」という、教育界の改革者である鈴木寛さんからの助言を受け、動き始めていた矢先に知ったのが「ネットの大学 managara」だった。

一方で、「managara」は、七十年超の歴史を持つ新潟産業大学の通信教育課程として二〇二二年春に開設された。スクーリングの必要がない、完全オンラインの大学だ。時間と空間の自由度があるぶん、スポーツ選手、

会社の経営者、家業をしている人でも、仕事の空き時間に授業を受けて学士を目指すことができる。阿野さんは言う。「『managara』のコンセプトは、完全オンラインでオンデマンドなので、いつでもどこにいても、その人のライフスタイルにあわせて学べる。通学時間も時間割もない自由度をいかして、何かプラスの価値をつけられないかと考えていました。地方の過疎化が進む中で、母体が新潟の大学ということもあり、地方の活性化に貢献したいという思いもありました。そんなときにTURNSで、信岡さんや『さとのば大学』を知って、私たちと組めば、地方でプロジェクト活動をしたり、地域のために貢献しながら大学を卒業できると確信して、紹介してもらいました」

オンラインで 関係性を育むコミュニティ

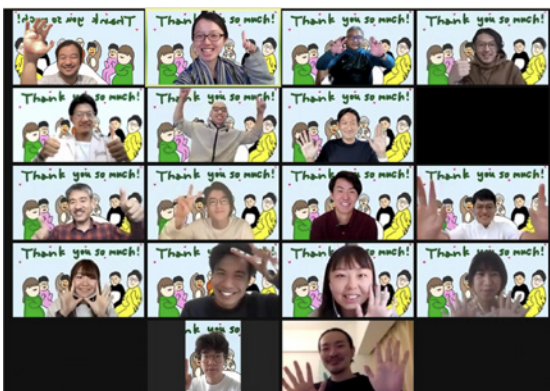
「さとまなプログラム」では、学生一人ひとりの興味や関心にあわせて地域を決め、地域での生活が始まってからは、午前中はオンライン講義を受講し、午後は地域の人々と関わりながら様々なプロジェクトを進めていく。周りに同世代が少ない環境で、モチベーションを維持するのは「見難しそうだが、さとまな生にとってはオンライン上で繋がる仲間が大勢いる。『さとのば大学』では、週三日午前中に、全国で活動中のさとのば生がオンラインで繋がり、二十人くらいがゼミのような感じで話し合う時間をつくる。そこで学生同士がお互いの動きを共有したり、いい刺激の場になっている。一方『managara』では、コミュニケーションツール Slack を使った学生間のコミュニティが盛んだ。オフラインの交流は、コロナ禍で難しい状況が続いていることもあり、まだ実現できていないものの、十一月には学生が主体になって初めてのオンライン学園祭が実現した。

地域で何かプロジェクトをしようと思うと、まず一番最初のフォロワーを集めるのが難しい。でも、さとまな生は、managara 生に対して「一緒にこんなことしませんか?」「こんな企画があるので地域に来ませんか?」と誘えることは大きい。実際、さとのば大学の二泊三日のショートプログラムに managara 生が参加し、来年からさとまな四年制に入ることが決まった例もある。また、さとまなプログラムでは地域の人々との関わりがあるが、managara 全体でい

『さとまなプログラム』を立ち上げたお二人。左から、『さとのば大学』を運営する株式会社アスノオト代表取締役の信岡良亮さん、『ネットの大学 managara』設立プロジェクトリーダーで株式会社ウィザス執行役員の阿野孝さん



ちょうど同じタイミングで、お互いのことを知り、同じ構想を考えていたという信岡さんと阿野さん。昨年秋の初対面の打ち合わせからわずか一か月半後には「さとまなプログラム」をリリース。さらに、翌春からはプログラムが始まり、今すでに第一期生となる学生が地域で学んでいるという驚きの速さだ



左上 西栗倉村では、小学生とともに学校給食の献立づくりを行った／右上 海士町で稲刈りの作業を手伝うさとまな生／左下 『managara』のオンライン学園祭では、ゲストを招いたトークイベントやグループワークなど多彩なプログラムを学生たちが企画／右下 オンラインで全国にいる仲間たちを対話をしながら、お互いに学びを深めていく

と、なかなか一人で学習を進められない学生もいる。完全オンラインであつたとしても、離れていても繋がっているという状態をどうつくるかが課題だ。関係性さえ最初にできていれば、「ちゃんと進んでる?」「これが分からないんだけど」といったやりとりはオンラインでも十分可能なのだ。

地域で動き出す「さとまな」受講生

この春から「さとまなプログラム」で学んでいる三名の学生たちが取り組んでいる地域のプロジェクトもユニークだ。一人目は、岡山県の西栗倉村で、ジビエ料理のレシピ開発に取り組んでいる。森が豊かな一方、獣害もあるなかで、地元の人はあまり鹿肉やイノシシ肉を食べない。そこで、地元の子ビエや野菜をつかったレシピを開発し、地元の小学生と、オンラインで繋がった大人たちとで一緒に料理を作り、食べるまで行いう企画なのだが、予想を超える盛り上がりを見せている。「もともと彼は料理が好きで、料理の道で生きていきたいという志を持っていた。だったら辻調理とかの方がいいんじゃない?」と面談のときに言ったんだけど、ただお店を経営するとかカフェをやるとかではなく、食育とか食の意味をちゃんと考えて、社会的にどうすればそういうことができるのかを学ぼうと思ったときに、『さとまな』の方がおもしろいと思ったのです」と信岡さんは紹介する。

少しずつステップアップしていくイメージだ。『会社はつくれなくてもいいけど、自分で自分の仕事をおもしろくできる人材がいい。言われなくても実験して、クオリティを考える。チームのごたごたもいっぱい経験した方がいい。そういうプロジェクトを、チームメンバーにとつても、クライアントにとつても、ユーザーにとつても、三方よしで納品できる力があれば、会社を作ろうと、大企業に勤めようと、NPOにこういう活躍できる。そういう人材が、これからの時代に生き残っていくと思うのです』。さらに、阿野さんは「そのような人材は、プラス思考だと思います。何かをやるときに『これはできるかもしれない』と考えること。『どうせ無理だ』とか『分らない』になつてしまうと手も足もでない。前向きに捉えられる人材は、自ずといろいろなやりたいいことを進めていける」と応答する。

昨年から大学入試が変わり、来年からは高校の授業に「探究学習」という科目が増えるなど、今教育業界は激変期を迎えている。そんな中、これからの「さとまなプログラム」が思い描く未来とは?「プロジェクト学習でがさがさ動きたい学生にとつて『さとまなプログラム』はすごくいい受け皿になるのではという話を大学の先生方ともしています。まずはいろんな地域でプロジェクト学習しながら大学卒業資格がとれるというのを当たり前にしていく。定着人材より回遊人材を育てることで、日本をかき混ぜる人材を増やしていきたい」と信岡さん

二人目は、京都で場づくりに取り組んでいる学生だ。今の教育システムがあまり好きではないという女子学生で、もつと新しい教育システムや、居場所づくりに興味があることから、京都に行つてみたいと学生側から提案があつた。当時、京都はまだ提携していなかったが、『京都移住計画』が受け入れてくれることになり、提携地域として京都が増えるきっかけに。

そして、三人目は、「さとまなプログラム」の一番分りやすいロールモデル」という島根県の海士町で活動中の学生だ。彼はもともと通信制の高校に通い、勉強はそこそこできるが、コミュニケーションや対人関係はあまり鍛えてこなかったため、社会人になることへの不安から、社会人になる前の準備期間として「さとまなプログラム」に入学した。今は海士町のシェアハウスで暮らし始め、島ではボランティア活動をする一方で、managara生とのオンラインでの交流にも積極的に参加していて、短期間での急成長がうかがえるという。

ほしい未来をつくれる人材を目指して

「不確実な時代に、会社に雇われるためじやなくて、自分たちで社会システムをつくれるといいなというのがベースにある」と信岡さんは語る。プロジェクトを作るステップに合わせて「プロジェクトレベル七人材」と呼び、おぼろげな未来、こんなことをしてみたいというのがレベル0から始まり、

ん。そして、「大学側としては、『managara』での学びと地域のプロジェクトをもつと繋げていけると思うので、学びが深まる形にしていけたらと考えています」と阿野さん。また、卒業後の進路やキャリア支援についても、すでに準備段階の計画があるという。慶應義塾大学で実験検証中のプロジェクトだが、ブロックチェーン技術を活用して、学生たちの学習履歴や、ボランティアなど様々な活動や学びを、プラットフォームのようなものの中に記録を残し、学生が許可する企業にだけ見せるという仕組みを「managara」でも取り入れようとしている。「さとまなプログラムの活動もしつかり記録して企業にみせていくというを通して、学生のキャリアが将来につながるような仕組みを整備していきたい。新しいテクノロジはどんどん取り入れていこうと思つています」と意欲を見せる。

オンライン化によつて可能性が広がつつある地域での学び。「さとまなプログラム」のお二人の話から感じられたのは、持続可能な社会づくりに確かに繋がっていく学びの仕組みであり、学生一人ひとりの生き方やキャリアに寄り添い、ゆつくりと成長を見ていく温かな眼差しだった。何かの尺度で測るようなことはせず、「あり方」を中心に考えることで、もつと自分を活かしたり、幸せになれる人がきつと増える。自分と社会の心地いいあり方と向き合う時間こそが、サステナブルな未来へつなげる一歩なのかもしれない。■